

◆次の【一】は、江戸時代の武芸者、渋川時英の文章であり、【二】は、ある生徒が【一】を理解するために文章中の言葉について調べたことをまとめたものである。後の問いに答えなさい。

【一】
有徳廟の時、伊豆の船児某を召し、日和見とたまふ。三十年ほどの間に一日も見損なし。其の子、其の父の業を継ぎて、今の日和見たり。しかるに度々見損あり。是の父は元来船児にて多年海上を往来し、命を懸けて日和を見習ひたる者ゆゑ自然とそこに妙を得て上手になりしを、子は父の譲を受けて衣食が豊かなれば、おのづから修行がおろそかになりて、父の伝のみを受け見習ひ、自分に困みたることなければ、**くはしく心を用ゐて稽古せざるゆゑ**なるべし。武芸の家の者など、最も心得あるべきことなり。

(「薫風雑話」による。一部省略等がある。)

(注) 有徳廟の時＝徳川吉宗が將軍として国を治めていた時代のこと。

譲を受けて＝「地位や財産を譲り受けて」の意味。
困みたること＝「苦勞すること」の意味。

【二】
船児某… 船頭の何とかという人。「船児」は、ここでは船長として海上で実務に就く船頭のこと
で、積み荷や乗組員の命を守る責務を負った。
「某」は名前がわからない人をさす語。
日和見… 空の状況を観察して、天候を予測すること。また、その人。和船の航海は好天順風を第一条件とするため天候の予測は重要だったが、**その技術は個人の経験に基づく**もので、他者への伝授は至難のことであった。

問 武芸者である筆者が伊豆の父子の話を話題にした意図について、ある生徒が次のようにまとめた。の部分に入れるのに適当な言葉を、【一】と【二】の内容をふまえて、十字以上、二十字以内で書きなさい。

武芸に携わる人たちに対し、武芸の家を継ぐには、**家系や親の教えだけに頼るのではなく、**
[]が大切だということを伝える意図。

生徒答案 「心を入れて、修行をすること」

【一】「心を用ゐて稽古せざるゆゑ」

↓「心を入れて稽古(＝修行)をしていないから」

【二】「その技術は個人の経験に基づく」



解答例：「自ら経験を積み修行に励むこと」

この話の登場人物は、日和見の父親とその子どもです。日和見、つまり現代で言う氣象予報士の父親の仕事を継いだ子どもが、修行を怠り失敗を重ねたことを具体例にして、筆者が武芸の家を継ぐ人たちの在り方を説いたものです。

前半に具体例、後半に教訓の文章構成になっています。

〈解説〉

筆者が父子の話話を話題にした意図について、武芸の家を継ぐには何が大切かをまとめる問題です。

この生徒答案は、空欄直前の「家系や親の教えだけに頼るのではなく」を手がかりに、【一】の「くはしく心を用ゐて稽古せざるゆゑなるべし」の部分を使って書かれたものです。この「稽古せざる」の「ざる」は、打消の助動詞「ず」の活用です。助動詞は、現代語訳をするうえで、重要な役割を果たしますので、しっかりと確認しましょう。

【一】「くはしく心を用ゐて稽古せざるゆゑ」を現代語訳すると、「心を込めて修行をしなかったため、」となり、息子が心を込めて修行をしなかったから失敗を重ねた。つまり、武芸の家を継ぐには、「心を込めて修行をすること」が大切だということです。

実はこの問題は、得点率が30%と低い問題でした。この答案も、実は減点されてしまう答案です。では、なぜ得点率が低いのでしょうか。それは、この生徒の答案のように【一】の内容しか踏まえていない答案が多かったからです。

では、この問題で○をもらうにはどうすればいいのか。それは、**設問の条件にある【二】の内容も踏まえて答案をつくる**ことです。

【二】の日和見の説明を確認すると、「その技術は個人の経験に基づくもの」とあります。だから、この問題の解答には、この内容が入っていないといけないことになるので、「自ら経験を積み、修行に励むこと」や「稽古に励み、自ら経験を積むこと」などが正解になります。熊本高校や済々黌などに合格するためには、ちょっとした減点が命取りとなります。減点を減らすためにも、設問の条件を細かく確認することが大切です。

◆次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、汝南の人、田の中に網を設けて、鼈を捕らんとす。やがて鼈かかりけれど、その網の主いまだ来たらざりしに、道行く人のあるが鼈をば盗みてけり。さりとて人の取り得たらんものをあやなく取りな人も罪深しと思ひて、その鼈の代はりに、携へ持ちし鮑魚一つを網の中に入れて行き去りたる程に、かの網の主来りて、鮑魚の網の中にあるを見て、このものここにあるべしとも覚え、いかさまにも現神のあらはれさせたまふにこそあらめとおほいにあやしむ。村の者ども皆寄り集まりて、やがて**祠**を建て入れまゐらせ、鮑君と名づけまゐらせけり。村の者ども病さまさま癒ゆることあれば、この御神の恵によりしところなりとて齋き祭るほどに、**御社おほきに作り出して**、賽の神楽の音絶ゆることなし。まことにめでたき御神にぞありける。七、八年ほど経て、かの鮑魚の主この御社のほとり過ぎて、「いかなる御神のかくはあらはれさせたまふらむ」といふに、己が留め置きし鮑魚なりける。「あなあさまし、それは自らが留め置きしものを」といひければ、かの靈験の事どもたちまち止みにける。

(「鬼神論」による。)

(注) 汝南Ⅱ地名。中国の河南省の県名。

鼈Ⅱシカ科の小動物。

鮑魚Ⅱ魚の干物。またはあわび。

現神Ⅱ靈験(ご利益)のある神。

祠Ⅱ神を祭るための**小さな社**。

賽の神楽Ⅱ神から受けた福に報いるために奏する舞楽。

この話の登場人物は、汝南の人、道行く人、村の者どもです。道行く人が網の中にかかっている小動物を盗もうとしましたが、それも申し訳ないと思い、代わりにあわびを置いていきました。道行く人の置いた鮑を汝南の人は神様だと思い込んだ結果、さまざまなご利益がありました。数年後、また通りかかった道行く人がこの光景を目にし、事情を村の者どもに話すと、人々はその勘違いに気づき、御利益がなくなってしまうという内容です。

問 次は、本文をもとにした話し合いの場面である。一・二に適切な言葉を補って会話を完成させよ。ただし、一・二にはそれぞれ十字以内でふさわしい内容を考えて現代語で答えること。

先生 「この話は、**人々の信仰心がご利益を生むことの例**として取り上げられたものです。では、どういう話か、みなさんでまとめてみましょう。」

生徒A 「人々は何を信仰しどんなご利益があったのかな。」

生徒B 「鮑魚を神と信じ鮑君として祭ったら『病さまざま癒ゆこと』があつて、それを人々はご利益と感じたんだね。」

生徒C 「その後、ご利益が鮑君のおかげだとして、**本文に『御社おほきに作り出して、賽の神樂の音絶ゆることなし』とあるように**、人々が鮑君を**一**ことがわかるよね。」

生徒B 「でも、最後にはその正体がわかり、**先生が初めにおっしゃったことから考えると**人々が**二**ことで、**御利益もなくなってしまう**んだね。」

生徒A 「なるほど。これは中国の話だけど、他の国にも似たような話がないか調べてみよう。」

一 祠（**二**小さな社）だったが「御社おほきに作り出し」た。

↓解答例：「さらに大切に祭った」

本文の内容をもとにした話し合いの場面の空欄を埋める問題です。

空欄の直前に「御社おほきに作り出して、賽の神樂音絶ゆることなし」とあるので、本文を確認します。もともとは「祠」だったものを、病気が治るといふご利益があったため、大きくしたことがわかります。この「祠」は、注釈から「小さな社」だったことがわかります。ということで、解答例は「さらに大切に祭った」となります。**古文の注釈は、記述問題の解答の手がかりになるので**、きちんと確認するようにしましょう。

≡ 生徒答案「祭ることをやめた」

「先生が初めにおっしゃったこと」

≡ 「人々の信仰心がご利益を生むこと」

◎ 鮑を神様だと信じる。

↓ 人々に信仰心 ある

御利益 ある

◎ 人が置いた鮑だった。

↓ 人々の信仰心 なくなった

御利益 なくなった



解答例：「信仰心をなくした」

この生徒答案は、空欄」の解答を手がかりにして書いたものです。空欄前後のつながりを確認すると、「人々が祭ることをやめたことで、御利益がなくなった」となり、悪くない解答のようですが、実はこの解答は誤答です。

では、何がいけなかったのでしょうか。空欄の前に「先生が初めにおっしゃったことから考えると」とあるので、初めの先生の発言を確認します。すると、「この話は、人々の信仰心が御利益を生むことを例として」とあるので、この解答では、「信仰心」がキーワードになります。信仰心があると、ご利益があり、ご利益がなくなるといいうことは、信仰心がなくなったということになるので、ここの解答例は「信仰心がなくなった」となります。

空欄を埋める問題では空欄の前後の内容が解答の手掛かりになることがほとんどです。この形式は入試でも頻出なので、必ず確認をしましょう。